

週日の説教

金 大烈 神父 2010年7月29日(木)

《イエス様と私達の関係 -家族のように-》

今日は、質問をさせていただきます。目を閉じて、「はい」であれば手をあげてください。「いいえ」であれば手をあげないでください。

では始めます。ご自分を客観的に見て、“愛が多い方だ。愛が豊かな方だ。”と思われる方は手をあげてください。ありがとうございました。目を開けてください。今手を上げた方は、客観的に見て“愛がある方だ”と思われたのですよね。その方々は、愛が多いことに感謝してください。また、手を上げなかった方は、“自分は愛を見せようとしてもなかなかそれができない。”というへりくだる心を持っているので、それに対しても感謝してください。

とにかく、今日の第一朗読(一ヨハネ 4・7 16)では、「**神は愛です。愛にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってください。**」とはっきりおっしゃっていますね。

ところで、今手を上げた方は、憎しみを感じる人の前ではどういう気持ちになるのでしょうか。もちろん手をあげた方にも嫌いだと思う人、憎しみを感じる人はいますよね。しかし「愛の生活をしています。」と言いながらも、嫌いな人がたくさんいれば、自信を持って、「私は愛が多い方です。」とは言えないでしょう。皆様、解決策が一つあります。もし嫌いな人が目の前にいたら、自分の関わりの中に入ら、このようにしてください。「私はこの人を愛さなければならない。もう私はこの人を愛している。この人を愛している。」と試してみてください。そうしたら、自分でも知らないうちに、その人に対する憎しみがなくなります。これは、人間の一つの意志の力だと思います。

結局私達には限界があります。嫌いな人がいます。その人を感情的に「愛しています。」と言ったらそれは嘘になります。しかしイエス様は、「そのような人も愛さなければならない。」とおっしゃいました。そのみ言葉を考えながら「私はこの人を愛するようになる。愛するように頑張る。」という自分との闘いと努力をしてください。そうすれば、自分でも知らないうちに、聖霊の働きによって、その人を見る目が変わっていく体験ができると私は確信します。

愛は、そのように宿題です。だから、宿題としてしっかり行いましょう。

さあ、今日の福音(ヨハネ 11・19 27)に入りましょう。今日の福音では、イエス様がマルタ、マリア姉妹の家を訪れましたね。よくご存知の物語ですよね。彼女達の兄弟であるラザロが死に、その頼りを聞いたイエス様が、彼女達の家に行ったのです。聖書はその時の様子を説明しています。マリアは、「“イエス様が来た。”という言葉も聞いても迎えに出なかった。」と書いてありますね。なぜあまり意味のないことが、わざわざ書いてあるのでしょうか。それは意味があるから書いてあるのです。その意味とは何でしょうか。一方、マルタは「イエス様を出迎えた。」と書いてありますね。そして「あなたがいてくださったら、私の兄弟のラザロは死ななかつたのに。」と言っています。この言葉はどう

という意味なのでしょう。

イエス様は、このマルタの家族と特別に親しい関係をもっていました。何度もこの家を訪ねる間柄だったようです。だから、マルタとマリアもイエス様のいろいろな奇跡や振る舞いを見たり、教を聞いたりしていたのです。マルタが食事を準備する物語も、皆さん知っていますよね。その時、マリアは食事の準備を全然手伝わずに、イエス様の足元に座って話に聞き入っていた、と先週の日曜日の福音(ルカ 10・38-42)にありましたね。そしてイエス様は、「本当に必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。」とおっしゃいましたね。マルタとマリアは、その物語の主人公達ですよ。

とにかく、ラザロが死んで、二人はどのような気持ちになったのでしょうか。マルタの「あなたがいてくださったら、私の兄弟のラザロは死ななかつたのに。」という言葉は、完全にイエス様への文句です。不満を言い表す言葉です。「食事を一緒にしたこともなく、何の交わりもない、関わりもない人々は、たくさん治してあげたのに、私たちのような親しい仲の人間には全然手を伸ばしてくれなかつたのですね。」と文句を言っているのです。マリアもきっと腹を立てたのでしょう。傷ついたのでしょう。だから、愛するイエス様が来たと聞いても迎えに出なかつたのです。これは女心かもしれませぬ。

このようなことを私たちは考えなければなりません。そしてイエス様は、この話の後どうしたのでしょうか？ ラザロを生き返らせますよね。

そういう話を読んで、私達が考えなければならないことの一つは、「イエス様に『近寄り難さ』を感じてはいないか」ということです。人格が素晴らしくて、尊敬される人には、近寄りにくい、近寄るのが難しい感じがしますよね。気軽に「もうごはんを食べましたか？」などと話しかけにくい気がします。そして愛情表現もしにくくなりますよね。今は全然違いますが、昔は親に対する子どもの気持ちがそうでした。先生に対する子どもの心もそうだったと思います。そういう気持ちが分かりますか？ たとえば、もし教皇様がこの太田教会にいらっしゃったならば、私達はどのような態度を見せるのでしょうか。気軽に友達のように、「やあ元気？ よく来てくれましたね。」というような態度を何の抵抗もなく見せられるのでしょうか？ きっとできないでしょう。形式的で、礼儀をきちんと守った対応になるのでしょうか。

たぶん、イエス様もそうだったのでしょうか。いろいろな奇跡を行い、いろいろな素晴らしいみ言葉を話され、軽んじることのできない力、誰でも引っ張られるカリスマ(掌握力)が人々に見えたと思います。ですから、周りの人々は近寄り難く感じていたでしょう。十二人の弟子たちでも気安く話しかけられる雰囲気ではなかつたと思います。しかし、このマルタの家族との関係だけはそうではありませんでした。

この福音を読んで皆様に話したいことは、マルタのようにイエス様と親密な関係を持つことが必要だということです。もしイエス様に言いたいこと(文句や感謝)があったら、言ってもよいのです。「イエス様、なぜこんなことになるのでしょうか。腹が立ちます。」「今日は、とてもよかったです。」このように話しかけられる親しみがなかつたら、私達はイエス様の愛を感じることはできません。尊敬

はできるかもしれませんが、本当にこの方と私は親しみという気持ちにはなれないでしょう。そういう意味で、イエス様は「あなた方をこれからは友と呼ぶ。」「神様を父（アッバ）と呼んでほしい。」とおっしゃったのです。

皆様、今日の福音を読んで、一つだけ心に刻みましょう。もちろん、恐れ敬う心も必要です。しかし、み旨を知るためには、もっとイエス様との距離感を無くしてください。1対1の関係になってください。愛しているのだから、もっと近づいて、自分の全てを見せてあげる、そういう気持ちになることが私達には必要だと思います。

私達とイエス様との関係は、少し固すぎるのではないか、と思うことがあります。

恐れ敬う心も必要ですが、本当に家族のように、パパ（父）のように、近づいて何でも言える関係を作ることが、私達の信仰生活の鍵になるのかもしれませんが。

ありがとうございました。